

## 青年期における愛他行動の発達とその規定因

松 井 洋

愛他行動は概ね年齢の関数でその頻度が増加するという研究が多い(Radke-Yarrow, M. R, et al, 1976, Rushton, J. P., 1980)。しかし, ある個人が愛他行動を遂行するまでに関与する外的, 内的条件は複数多岐である。例えば, 外的条件として行動することによるリスクや他者の存在等, 内的条件として情緒や道徳判断などの認知過程等が関与している(Eisenberg, N., 1986)。そのために, 小学校高学年の児童は, 低学年の児童よりむしろ愛他行動の遂行レベルは低下するという報告もある(Stub, E, 1970, Midlarsky, E., & Hannah, M. E., 1985)。小学校の年長児では, 自分の人を助ける能力を考慮してしまったり, 自分の行動に対する他者の評価を心配したりする等, 愛他行動を抑制する要因も発達するため, 第三者が存在したりする等の条件によっては, かえって愛他行動を遂行しなくなるという傾向もあるわけである。このように, 愛他行動の遂行とその動機づけ等の遂行に至る過程は, 年齢とともに直接的に発達するとはかならずとも言えない。

著者らの研究グループは現在日本, 米国, 韓国, 中国の中・高校生を対象に愛他行動の国際比較研究を行っている(代表 中里至正, 研究結果の一部は中里他1990に掲載)。この研究によれば, いくつかの愛他行動場面において, 日本の中・高校生は米国や中国の中・高校生より愛他行動をしないと答える傾向がある。しかし, この傾向は日本人の一般的特徴なのか, あるいは日本の中・高校生の愛他行動の発達が遅く, 後に愛他行動をするようになるのかということとはわかっていない。また, 愛他行動を行う理由が, 他の国では「助けるのは義務だ」というような理性的理由が多いのに対して, 「かわいそうだ」というような情緒的理由が日本の中・高校生では多い。この愛他行動の理由, すなわち動機づけ側面の発達についても問題が提起されている。

本研究はこれらの結果に基づき, 愛他行動の青年期における発達とその規定因について検討することが目的である。そのために, 中里他(1990)と同じ愛他行動の遂行に関する質問項目を大学生に実施して, 高校生と大学生の愛他行動の違いについて検討する。また, 愛他行動を行う理由について, Eisenberg(1976)は中・高校生では共感的志向が多いが, 高校生ではさらに内面化された価値や規範への言及が増加していくという。事実, 前述の比較研究でも米国の高校生ではそのような傾向がみられ, 中学生に比べて高校生では情緒的理由が減少し理性的理由

が増加している。しかし、日本の高校生ではそのような傾向はみられず、むしろ理性的理由は減少する傾向にある。そこで、愛他行動の判断過程についても高校生と大学生の比較を行い、情緒的理由が日本人特有のものか、単に発達が米国より遅いのかを検討する。さらに、以上の愛他行動とその判断過程を規定する要因について検討する。この個人要因としては他者認知、共感、道徳判断等が考えられ、また、これらにの要因を規定する環境要因として親子関係、親の教育、親の行動、学校環境が考えられる。これらの諸要因と愛他行動との関係についても検討する。また、情緒的理由に基づく情緒的愛他反応と理性的理由に基づく理性的愛他反応を規定する個人要因、環境要因についても検討する。

## 方 法

### 1. 対象

東京及び近県の大学生319名(男子83名, 女子236名)。なお, 比較のために中里他(1990)より東京及び金沢の高校生557名(男子277名, 女子280名)の結果を用いた。

### 2. 質問紙

以下の調査項目よりなる質問紙調査を行った。

(1) 愛他反応：以下の8状況についての説明文を呈示し、「自分で助ける」、「人を呼ぶ」、「助けない」、「何ともいえない」等の4選択肢を設けた。選択肢は状況によって異なるが、何らかの愛他行動をするという愛他反応が2選択肢、「しない」もしくは「なんともいえない」が2選択肢である。また、愛他行動するという選択肢は「自分で助ける」というようなりスクの高いものと、「人をよぶ」というようなりスクの低いものがあり、これによって後に愛他反応得点の産出を行った。

〔緊急援助〕「学校に遅れそうになり道を急いでいる時に、前を歩いていた人が倒れた」(相手が知っている人, 知らない人の2状況)。

〔援助〕「学校から帰る混んだバスの中に座っていると前に年寄りが立っている」(相手が知っている人, 知らない人の2状況)。

〔分与〕「登山の最中、出会った人に水を分ける。あまり水は残っておらず、これからも補給は難しい」(相手が知っている人, 知らない人の2状況)。

〔寄付〕「困っている友達に皆でお金を集めてあげる」。

〔奉仕〕「休日にボランティアで小学生に水泳を教える」。

以上の状況の各々に関して、愛他行動をするという回答についてはその理由を4選択肢より

選ばれた。4 選択肢のうち2つは「かわいそうだ」、「つらそうだから」という情緒的愛他反応で、他の2つは「助けるのは義務だから」、「助けなくてはいけないから」という理性的愛他反応である。また、愛他行動をしないという回答に対しても「かわいそうと思わない」、「責任がない」、「自分のことがある」、「原因がわからない」、「他の人がなんとかする」、「できない」、「人の目が気になる」、「その他」のいずれかを選択させた。なお、以上の8状況と回答は比較のため中里(1990)と同一のものを用いた。

また、以上の他に「飛行機が墜落して冷たい河に浮かび助けを待つ時、救助のロープを他の人に譲る」と「アパートに一人住まいの女子学生が暴漢に教われ助けを求めたが助ける人はいなかった」の2つの愛他行動の実例を提示し、その行動についての意見、行為の理由、自分ならどうするか、なぜそうするのかについて選択肢と自由記述によって回答を求めた。

(2) 個人要因：愛他行動と関係し得る以下の個人的変数について質問し、「まったくそのとおり」から「まったくそうではない」までの4件法で選択させた。

〔他者認知〕他者の心理、欲求、感情、思考、立場がわかる等他者の認知に関して14項目。

〔共感〕他者の喜び、哀しみ、苦痛に影響され自分も同様の情緒を持ちやすい共感に関して5項目。

〔気づかい〕他者に気をつかい、サービスすることについて2項目。

〔自己中心〕自分中心に物事を考え、自分がそんをする事を嫌う自己中心性に関して2項目。

〔規範意識〕規則を守り、不正をしない等規範を遵守しようとする事について3項目。〔他者志向〕自分より他者を考える、皆の幸福を考える等他者についても考える他者志向の考え方について2項目。

〔適応感〕だいたいのはうまくやれるという適応感について2項目。

(3) 環境要因：愛他行動と関係し得る成育過程の環境的変数についての質問項目。

〔父子関係〕父との適応、父親の愛他行動やその教育について4項目。

〔母子関係〕母との適応、母親の愛他行動やその教育について4項目。

〔躰〕家庭や学校の躰の厳しさについて2項目。

〔学校教育〕小、中、高校における愛他行動の教育に関して2項目。

以上の他に年齢、性などの項目を含め合計85項目の質問し調査を実施した。

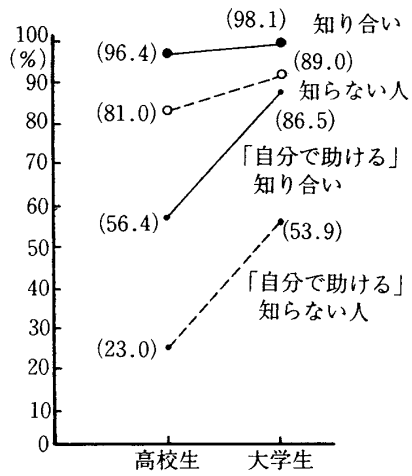


図1-a. 愛他反応率 (%) 緊急援助

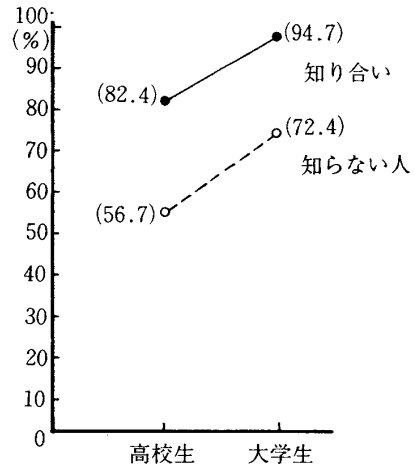


図1-b. 愛他反応率 (%) 援助

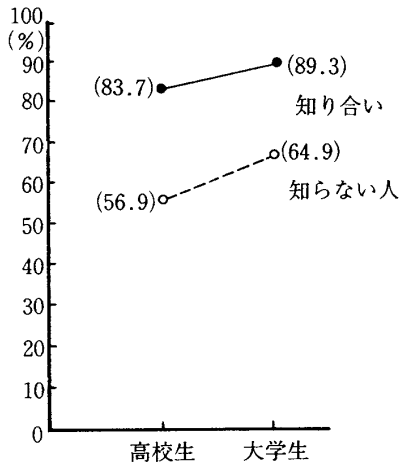


図1-c. 愛他反応率 (%) 分与

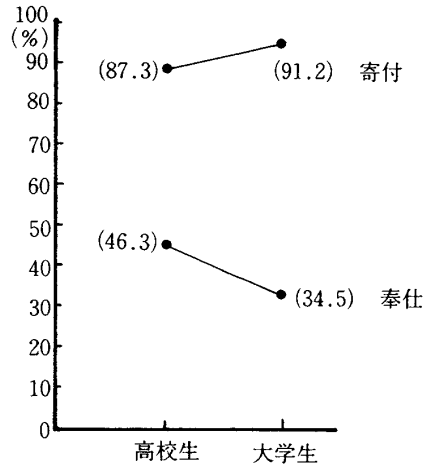


図1-d. 愛他反応率 (%) 寄付・奉仕

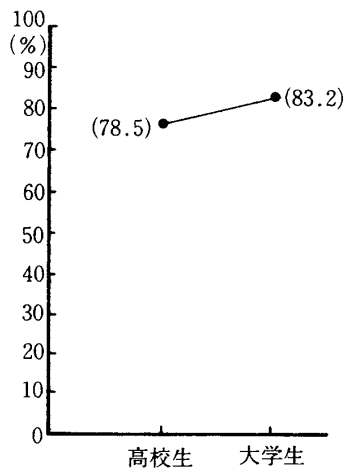


図1-e. 愛他反応率 (%) 総合

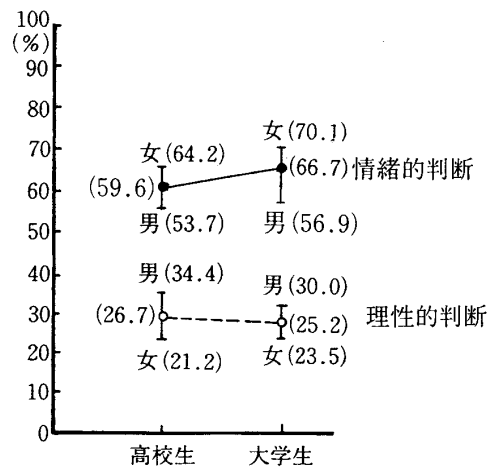


図2. 愛他反応率 (%) 情緒的・理性的判断

## 結果と考察

### 1. 愛他反応の高校生と大学生との比較

愛他反応の状況別の総合の頻度を図1のa.～e.に示す。高校生より大学生の愛他反応率(愛他行動をするという答2問の割合)が高いのは緊急援助{(知らない人)以下 $\chi^2$ 検定,  $\chi^2 = 7.073, P < .01$ }, 援助{(知っている人) $\chi^2 = 4.766, P < .01$ , (知らない人) $\chi^2 = 19.908, P < .01$ }, 分与{(知っている人) $\chi^2 = 4.121, P < .05$ , (知らない人) $\chi^2 = 4.437, P < .05$ }である。寄付は差がなく, 奉仕は反対に高校生の方が高い( $\chi^2 = 23.927, P < .01$ )。8状況の総合では高校生より大学生が高い( $\chi^2 = 22.472, P < .01$ )。以上のように全体的には高校生より大学生の方が愛他的に反応すると言え, 特に図1-a.のように, より行動のリスクが高いと思われる「自分で助ける」という答えの割合も高くなる。しかし, 図1-d.の奉仕のように行動によっては大学生はむしろ愛他反応率が低下する場合もある。愛他行動は青年期でも年齢とともに全般的には発達すると言えるが, 愛他行動の種類や状況によっては行動の低下もあり得るという結果である。

男女差については, 女子の方が愛他的なのが援助(知っている人) $\chi^2 = 4.129, P < .05$ , (知らない人) $\chi^2 = 4.113, P < .05$ であるが, 他の行動については男女差はなく, 総合でも差はない。よって, 性によって愛他反応に差があるとは言い難い。

### 2. 情緒的反応と理性的反応

愛他行動をする理由については図2のとおりである。理性的反応率は高校生26.7%, 大学生25.2%で両者の間で差がない。しかし, 情緒的反応について高校生59.6%, 大学生66.7%で, 高校生より大学生の方が多くなっている( $\chi^2 = 57.173, P < .01$ )。愛他行動の理由は, 高校生以降共感的な理由から内的な価値判断に移行するというEisenberg(1976)の説は支持されず, 大学生では高校生より共感につながる情緒的な理由が増加している。

男女差については情緒的反応率は女子に多く( $\chi^2 = 15.913, P < .01$ ), 理性的反応は男子に多い( $\chi^2 = 4.276, P < .05$ )。この傾向は高校生の結果と一致する。なお, 本研究では女子の対象者の割合が多いが, 男女ともに大学生で情緒反応率が増加するという一致した傾向を示しており, 大学生の全体で情緒反応が増加したという結果は女子の割合によるものではない。

### 3. 愛他反応と他の要因との関係

愛他行動の遂行に至るまでに関与する個人的要因と, 愛他的傾向を形成する発達上の環境要因について検討するため, 対象者を愛他的, 非愛他的な群に分けて他の項目との関係を分析し

表1 愛他反応(総合)と他の要因・項目との関係( $\chi^2$ 値)

個人要因		項目			
他者認知	8.263**	人は気持ちが顔に出る	3.375+		
		気持ちがわかる	4.567**		
		ドラマなどの主人公の心理がわかる	6.146*		
		人の望みがわかる	15.630**		
		人の喜ぶことがわかる	13.055**		
		人の立場で考えられる	8.383**		
		他の人の視点で物事を見られる	3.313+		
		共感	8.268**	友達の悩みにまきこまれる	5.939*
				人が冷たくされると腹立たしい	14.551**
				悲しむ人を見ると自分も悲しい	9.542**
怪我をした子猫をみると心が痛む	4.363*				
		人が喜ぶと自分までうれしくなる	10.255**		
		悲しい映画を見てもらい泣きする	2.848+		
気づかい	6.430**				
自己中心	9.620**	一人のことより自分のことを考える	4.898*		
		一自分だけ損をするのがまんがならない	9.798**		
規範意識	13.493**	人の不正をだまっていられない	4.852*		
		キセルをしたりしない	12.171**		
		規則は必ず守るほう	8.028**		
他者志向	11.583**	自分より人のことを考えることが大切	5.839*		
		皆が幸福にならなければ個人の幸福はない	12.042**		
環境要因					
父子関係	2.917+	父は他人のためを考えるよう教えた	2.750+		
母子関係	10.514**	母とうまくいっている	3.107+		
		母は他人のためを考えるよう教えた	3.118+		
		母は他人のためを考えて行動していた	4.067*		
		学校教育	8.394**	中学で他人のことを考えるよう教わった	2.797+
小学校で人の事を考えるよう教わった	3.246+				

+P&lt;.10, \*P&lt;.05, \*\*P&lt;.01

た。8状況の愛他反応のうち「自分で助ける」等最もリスクを伴う回答を4点、「人を呼ぶ」等リスクは低い愛他的な回答を3点、「なんともいえない」を2点、「しない」を1点として愛他得点を算出し、8状況の合計により上位、下位の約3分の1を目安に愛他群と非愛他群を分類した。その結果愛他群115名、非愛他群118名となった。

〔実際の愛他行動との関係〕まず、実際の愛他行動の例との関係では『川の中で救助のロープを譲った人』に対して、愛他群は「自分は助ける」( $\chi^2=5.644, P<.05$ ), 「かわいそうだから

ら」( $\chi^2=4.034$ )という反応が多く、非愛他群は「がんばりすぎ」( $\chi^2=4.182, P<.05$ )、「自分はしない」( $\chi^2=8.738, P<.01$ )、「自身がないから」( $\chi^2=8.251, P<.01$ )という反応が多かった。『アパートで助けを呼ぶ女子学生を助けなかった人』に対しては、愛他群は「自分は助ける」( $\chi^2=11.045, P<.01$ )、「助けるのは義務だから」( $\chi^2=8.744, P<.01$ )という反応が多く、非愛他群は「しかたがない」( $\chi^2=9.361, P<.01$ )、「自分はしない」( $\chi^2=8.905, P<.01$ )、「恐いから」( $\chi^2=5.154, P<.059$ )という反応が多かった。以上のように本調査において愛他的とした人は、実際にあった場面でも愛他的に振る舞おうとする傾向があるといえる。

〔個人要因と愛他反応の関係〕表1.に個人要因、環境要因の各要因とその要因に含まれる項目のなかで愛他反応と有意な関係、もしくはその傾向があったものを示した。愛他反応と有意な関係のある要因は他者認知に優れ、他者に共感を持ち、他者に気づかいをし、自己中心的でなく、規範意識が強く、他者の事も考える他者志向が強いという要因であった。

個人要因によって愛他群、非愛他群を判別させる判別分析を行なった。結果は、判別率は66.094%となった。愛他的か非愛他的かは情緒・認知などの個人要因によってかなり説明できるということである。判別式は $Y = (0.4652 \times \text{他者認知}) + (0.4129 \times \text{共感}) + (-0.6377 \times \text{自己中心}) + (0.5746 \times \text{規範意識}) + (0.0412 \times \text{気づかひ}) + (-0.0505 \times \text{適応}) + (0.2327 \times \text{他者志向})$ となる。

また、愛他反応と関係が強い項目15項目による、愛他群、非愛他群の判別分析を行った。結果は、判別率63.090%であった。また判別係数は $Y = (0.1358 \times \text{気持ちがわかる}) + (0.479 \times \text{望みがわかる}) + (0.3412 \times \text{喜ぶことがわかる}) + (-0.0846 \times \text{悩みにまきこまれる}) + (0.4964 \times \text{人が冷たくされると腹立つ}) + (0.2734 \times \text{自分も悲しくなる}) + (-0.1141 \times \text{自分まで嬉しい}) + (-0.1223 \times \text{自分のことを考える}) + (-0.5856 \times \text{損をするのは我慢がならない}) + (0.2491 \times \text{不正をだまっけて見てはいられない}) + (0.2791 \times \text{キセルをしない}) + (0.0728 \times \text{規則は守る}) + (0.0937 \times \text{人のことを考える}) + (0.1631 \times \text{皆の幸福})$ となる。

どちらの判別分析の結果も愛他反応の背景には自己中心でなく、規範意識が強く、他者認知ができ、共感的であるという要因があることを示している。

〔環境要因と愛他反応の関係〕表1.の愛他反応と有意な関係もしくはその傾向のあった環境要因は、父子関係、母子関係、学校教育であり、特に母子関係と学校教育は愛他反応と強い関係がある。

愛他群、非愛他群と環境要因との判別分析の結果、判別率は58.798%であった。個人要因による判別率よりは低い、愛他反応は親・学校などの要因によってかなり説明できるということである。また、判別式は $Y = (-0.0017 \times \text{父子関係}) + (0.2253 \times \text{母子関係}) + (-0.2590 \times \text{躰}) +$

(0.6278×学校教育)であった。学校教育が最も重要であり、また、父親の要因より母親の要因の方が重要という結果であった。

愛他群、非愛他群と環境項目との判別分析の結果、判別率は60.515%であった。また、判別式は $Y = (0.2519 \times \text{父とうまくいく}) + (-0.4812 \times \text{父が可愛がった}) + (-0.3218 \times \text{父は他人のため教えてくれた}) + (0.4589 \times \text{父は他人のため行動}) + (-0.6384 \times \text{母とうまくいく}) + (0.6313 \times \text{母が可愛がってくれた}) + (0.2968 \times \text{母は他人のため教えてくれた}) + (-0.7402 \times \text{母は他人のため行動}) + (0.2498 \times \text{中・高校の躰厳しい}) + (0.2372 \times \text{家庭の躰厳しい}) + (0.2145 \times \text{学校楽しみ}) + (-0.7923 \times \text{中・高校で他人のため教わる}) + (-0.4324 \times \text{小学校で他人のため教わる})$ である。

以上の結果から、母親の要因と学校の要因が愛他反応と関係が大きい。特に、学校で愛他行動を教える事が重要であり、両親が愛他行動を教えるより、実際に行動する事が重要であるということが言える。

#### 4. 情緒的愛他反応と理性的愛他反応

〔情緒的愛他反応〕前述のように、愛他反応のうち66.7%が情緒的理由による愛他反応であった。この情緒的愛他反応と個人要因、環境要因との関係は表2.のとおりである。個人要因

表2 情緒的愛他反応と他の要因・項目との関係( $\chi^2$ 値)

個人要因		項目	
他者認知	3.807+	人は気持ちが顔に出る	3.703+
		気持ちがわかる	3.045+
		ドラマなどの主人公の心理がわかる	2.774+
		こどもの気持ちがよくわかる	3.073+
		人の喜ぶことがわかる	3.138+
		人の立場で考えられる	5.020*
		共感	3.527+
		悲しむ人を見ると自分も悲しい	7.439**
気づかい	9.510**	人にサービスすることが多い	3.312+
規範意識	3.397+	人の不正をだまっていられない	10.436**
他者志向	11.334**	皆が幸福にならなければ個人の幸福はない	5.216*
環境要因			
父子関係	4.535*	父は他人のためを考えるよう教えた	2.950+
母子関係	11.990**	母は他人のためを考えるよう教えた	6.144*
		母は他人の為を考えて行動していた	5.834*
(学校教育)		小学校で人の事を考えるよう教わった	2.890+

+P<.10, \*P<.05, \*\*P<.01



について前項の愛他反応と異なるのは、自己中心の要因や項目が情緒的愛他反応と有意な関係がないことである。

情緒的愛他行動の高・低の個人要因の判別分析の結果判別率は63.768%であった。判別式は  $Y = (0.4546 \times \text{他者認知}) + (-0.0073 \times \text{共感}) + (0.0272 \times \text{自己中心}) + (0.2491 \times \text{規範意識}) + (0.6928 \times \text{気づかい}) + (-0.4819 \times \text{適応感}) + (0.2905 \times \text{他者志向})$  である。他者への気づかい、他者認知、適応等対人関係の要因が重要だという結果である。

表2.の個人項目による判別分析の結果、判別率は67.149%であった。判別係数は  $Y = (-0.0445 \times \text{気持ち顔に出る}) + (0.0292 \times \text{気持ちわかる}) + (-0.2055 \times \text{心理わかる}) + (0.2302 \times \text{こどもの気持ちわかる}) + (0.3962 \times \text{喜びわかる}) + (0.4501 \times \text{人の立場に立つ}) + (0.4501 \times \text{人が冷たくされると腹立つ}) + (0.3126 \times \text{自分も悲しくなる}) + (0.8958 \times \text{不正見ていられない}) + (0.3080 \times \text{人にサービス}) + (0.0820 \times \text{皆の幸福})$  となる。不正を見ていられない、人の立場に立って考えると、人が冷たくされると腹が立つの係数が大きく、特に不正を見ていられないが大きい。

以上のように、情緒的愛他反応の背景には必ずしも情緒や共感的な変数だけでなく、他者認知や規範意識などの認知的過程と言い得る変数も関与していると考えられる。また、共感の要因と情緒的愛他反応との関係が、要因による判別分析では重要ではないという結果であるが、表2.の結果や項目別の判別分析の結果から、共感 は情緒的愛他反応と関係があると考えた方が妥当である。

情緒的愛他反応と環境要因との関係は表2.のように母の教育、母の行動等母親の影響が強い。父親は母親に比べて関係は小さく、また、学校教育は有意な関係がない。

情緒的愛他反応の高・低の環境要因による判別分析結果、判別率は61.352%であった。判別式は  $Y = (0.0804 \times \text{父子関係}) + (0.4323 \times \text{母子関係}) + (-0.0726 \times \text{躰}) + (-0.0885 \times \text{学校教育})$  となり、判別分析によっても情緒的愛他反応は母子関係と関係が強いと言える。

環境項目による判別分析の結果は判別率66.183%と比較的高い。判別式  $Y = (-0.0857 \times \text{父とうまくいっている}) + (0.2675 \times \text{父は可愛がってくれた}) + (-0.3146 \times \text{父は他人のため教えてくれた}) + (0.5556 \times \text{父は他人のため行動していた}) + (0.2399 \times \text{母とうまくいっている}) + (0.4665 \times \text{母は可愛がってくれた}) + (1.1060 \times \text{母は他人のため教えてくれた}) + (-0.2049 \times \text{母は他人のため行動していた}) + (0.1890 \times \text{中・高校の躰厳しい}) + (-0.3964 \times \text{家庭の躰厳しい}) + (-0.4646 \times \text{学校楽しみ}) + (-0.2695 \times \text{中・高校で他人のため教わった}) + (0.1825 \times \text{小学校で他人のため教わった})$  となる。やはり母親の変数の係数が大きい、特に母親が他人の為に行動する事を教える事が情緒的愛他反応につながる。父親については教えることより父親自身の行動が重要

表3 理性的愛他反応と他の要因・項目との関係( $\chi^2$ 値)

個人要因		項目	
(共感)		人が冷たくされると腹立たしい	3.251+
		人が喜ぶと自分までうれしくなる	4.848*
自己中心	6.141*	一人のことより自分のことを考える	2.959+
		—自分だけ損をするのはがまんならない	6.758**
規範意識	7.630**	キセルをしたりしない	5.688*
		規則は必ず守るほう	6.501*
他者志向	9.611**	自分より人のことを考えることが大切	9.626**
		皆が幸福にならなければ個人の幸福はない	2.918+
環境要因			
父子関係	3.212+	父は他人のことを考えて行動していた	3.693+
母子関係	3.194+	こどものころ母は可愛がってくれた	2.936+
		母は他人のことを考えて行動していた	2.974+
学校教育	9.570**	中学で他人の事を考えるよう教わった	5.010*
		小学校で人の事を考えるよう教わった	6.475*

+P&lt;.10, \*P&lt;.05, \*\*P&lt;.01

である。情緒的愛他反応と学校教育はあまり関係がないようである。

〔理性的愛他反応〕 理性的愛他反応は全体の25.2%と少なく、また、年齢とともに優勢になるという説もあるが、前述のように本研究の結果は大学生ではむしろ低下していた。この理性的愛他反応と有意な関係のある個人要因・項目、環境要因・項目は表3.のとおりである。表2.の情緒的愛他反応と個人要因の関係と異なるのは他者認知、共感、気づかひの要因がなくなり、自己中心の要因があることである。対人関係の要因より、自己の判断や態度等の認知的側面が理性的愛他反応と関係があるということである。

理性的愛他反応の高・低を個人要因で判別分析した結果は、判別率59.633%であった。判別式は $Y = (-0.0202 \times \text{他者認知}) + (0.0296 \times \text{共感}) + (-0.5197 \times \text{自己中心}) + (0.7487 \times \text{規範意識}) + (-0.4800 \times \text{気づかひ}) + (0.2793 \times \text{適応感}) + (0.5317 \times \text{他者志向})$ となる。情緒的愛他反応とは異なり、他者認知や共感の係数が殆ど0であり、規範意識や他者志向、自己中心の係数が大きい。これは表3.の結果と一致する。

理性的愛他反応を表3.の個人項目によって判別分析をした結果、判別率は61.9266%となった。判別式は $Y = (0.0146 \times \text{人が冷たくされると腹立つ}) + (0.1680 \times \text{人が喜ぶと自分もうれしい}) + (-0.1840 \times \text{自分のことを考える}) + (-0.4352 \times \text{自分だけ損はがまんならない}) + (0.3944 \times \text{キセルしない}) + (0.2511 \times \text{規則守る}) + (0.6787 \times \text{人の事を考える}) + (0.1710 \times \text{皆の幸福})$ となる。

自分より人のことを考えることが大切、自分だけ損をしてもかまわない、キセルしない等の価値観や認知的項目の係数が大きい。以上のように理性的愛他反応は自己中心でなく規範意識が高く他者志向であるという個人要因と関係が深い。しかし、共感などの情的要因とは関係が小さいことが特徴である。

理性的愛他反応と環境要因との関係は表3.のとおりである。情緒的愛他反応では親子関係の要因が重要であったが、理性的愛他反応の場合は学校教育との関係が強い。

理性的愛他反応の高・低を環境要因によって判別分析すると、判別率は58.715%と比較的低い。判別式は $Y = (0.0418 \times \text{父子関係}) \times (0.0414 \times \text{母子関係}) + (-0.1246 \times \text{躰}) + (0.6931 \times \text{学校教育})$ である。理性的愛他反応は学校教育によってかなり説明でき、親子関係は相対的に重要ではないと言える。

理性的愛他反応を環境項目で判別分析すると、判別率は62.385%である。判別式は $Y = (-0.1467 \times \text{父とうまくいってる}) + (-0.1801 \times \text{父は可愛がってくれた}) + (0.4470 \times \text{父は他人のためを考えるよう教えた}) + (-0.1169 \times \text{父は他人のために行動していた}) + (0.6302 \times \text{母とうまくいっている}) + (0.1342 \times \text{母は可愛がってくれた}) + (-1.2868 \times \text{母は他人のためを考えるよう教えた}) + (0.8136 \times \text{母は他人のため行動していた}) + (0.0048 \times \text{中・高校の躰厳しい}) + (-0.0025 \times \text{家庭の躰厳しい}) + (0.3778 \times \text{学校楽しい}) + (0.3000 \times \text{中・高校で他人のため教えた}) + (0.6836 \times \text{小学校で他人のため教えた})$ である。要因による判別分析とは少し異なり、母親の教育や行動の係数が大きい、やはり学校教育についての項目の係数が大きい。

以上、理性的愛他反応と他の環境要因・項目との関係について総合すると、情緒的愛他反応と異なる点は学校の役割が大きく、親・学校による教育が重要と言う点である。

### 全体考察

1. 愛他行動の発達：大学生の愛他反応は高校生に比べて、その割合はわずかだが有意に増加した。質的には「自分で助ける」という積極的でリスクの高い行動について大学生は高校生より愛他反応が高かったが、奉仕についてはむしろ明らかな低下を示した。このように青年期では児童期にみられるような大きな愛他行動の量的増加はなく、天井効果がみられる。しかし、量的発達が停止したとは言えず、愛他性の発達は青年期以後も続くと思われる。また、質的には変化をし続けていると言え、それは、愛他行動の状況要因との関係と次の愛他行動の内的過程の両者で生じると考えられる。
2. 情緒的愛他反応と理性的愛他反応：Eisenberg (1976) の説から考えると、高校生より大学

生の方が理性的愛他反応は増加し、情緒的愛他行動は減少するということになる。しかし、本研究の結果はこの予想に全く反していた。理性的愛他反応は大学生で僅かに減少し、情緒的愛他反応は有意に増加した。この原因のなかには調査・実験の状況や質問の違いもあるかもしれないが、これは文化の違いと考えた方が良いであろう。例えば中里他(1990)では、日本の中・高校生は米国・中国・韓国に比べて明らかに情緒反応が多い。そこで、この傾向は日本の青年期の初期における一過性のものではなく日本人の特性と考えた方がよいと考える。そして、情緒的反応を基にした愛他行動が理性的判断を基にした愛他行動より発達上低いものだとは言いがたいとも考えられる。他方、この傾向は日本人の弱点とも理解できる。日本青年は愛他的な判断や道德意識に欠けるということである。そう考えるならば、日本の愛他性を増すために、後述の理性的愛他行動と関係の強い環境要因を強化する必要がでてくる。

3. 愛他反応と個人要因：愛他反応と個人要因について、愛他反応の高・低の両群と個人要因、個人要因の項目のクロス集計と判別分析を行った。その結果、規範意識、自己中心でない、他者認知、共感等の要因が愛他反応と関係があることが分かった。これまでも愛他行動が行われるためには情緒的・認知的な多くの要因が関与すると言われている(例えば Eisenberg, 1968 のモデル)。本研究の結果もそれを裏付けている。そして、共感などの他者との情動的な人間関係と、規範意識などの判断や認知過程の両者ともに重要なことであることを示している。

4. 愛他反応と環境要因：愛他反応と環境要因について3.と同じ分析をした結果、学校で愛他行動について教えること、親子関係の要因、特に母親の要因、そして、特に母親が愛他行動を行うことが特に愛他反応と関係する環境要因であった。

5. 情緒的愛他反応・理性的愛他反応と個人要因：情緒的愛他反応と関係がある個人要因は他者認知、共感、気づかい、規範意識、他者志向等の対人関係の要因である。愛他反応全体と関係のあった自己中心は情緒的愛他反応とはあまり関係が無い。

他方、規範意識や他者志向のような認知過程と考えられる要因も情緒的愛他反応と関係があった。情緒的愛他反応、すなわち困っている人を見て「かわいそう」、「つらそう」というような情緒的反応を示す過程では、他者の事に積極的な関心を持ったりすることが必要であり、また、そのような良くない状況に情緒的に反応することは、不正を許さないという規範意識とも関係が深いと考えられる。

理性的愛他反応と関係のある個人要因は自己中心でない、規範意識が強い、他者志向という要因であった。情緒的愛他反応とは異なり、理性的愛他反応は他者認知や共感の要因とは殆ど関係がなかった。このような認知的な道德判断と言える要因が理性的愛他反応と関係があることは当然とも言えるが、理性的愛他行動をするためには「かわいそう」という気持を持った

けでは不十分で、何らかの道徳判断・意識を学習する必要があるということである。

6. 情緒的愛他反応・理性的愛他反応と環境要因：情緒的愛他反応と関係のある環境要因は父親の要因，母親の要因である。特に「母は他人のために行動するよう教えてくれた」等の母親の教育や行動と情緒的愛他反応との関係が強い。父親の教育や行動は母親程強い関係が無く，学校教育も情緒的愛他反応とはあまり関係が無い。

理性的愛他反応と関係がある環境要因は学校教育であり，情緒的愛他反応と異なり親の役割は相対的に小さい。また，親にしても学校にしても教えるということが重要である。高校生より大学生の理性的愛他行動が低下し，情緒的愛他反応が増加すること，中里他(1990)のように日本の中・高校生の理性的愛他反応が少ないことから，愛他行動をするべきだ，自己中心ではいけない，人の事を考える必要があるという愛他性の道徳判断・意識を積極的に教える必要があると言える。

## 引用文献

- Eisenberg, N., 1968 *Altruistic emotion, cognition and behavior*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H., 1989 *The roots prosocial behavior in children*. Cambridge University Press.
- Eisenberg, N., 1976 *The Development of Prosocial Moral Judgement and Its Correlates*. Ph. D. Dissertation, University of California Berkeley, 1976.
- (Mussen, P. H., & Eisenberg, N., 1977 *Roots of Caring, Sharing and Helping: the Development of Prosocial Behavior in Children*. Freeman より引用)
- Midlarsky, E., & Hannah, M. E. 1985 Competence, reticence, and helping by children and adolescents. *Developmental Psychology*, 21, 534-541.
- 中里至正 加藤義明 杉山憲司 松井 洋 1990 非行抑止要因の文化差に関する研究——日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として——(財)日工組調査研究財団委託研究報告書。
- Radke-Yarrow, M., Zahn-Waxler, C., & Chapman, M. 1983 Children's prosocial dispositions and behavior. In Mussen, P (Ed.), *Manual of child psychology*. vol. 4: Socialization, personality, and social development (pp. 469-545). (E. M. Hetherington, Ed.). New York: Wiley.
- Rushton, J. P. 1982 Social learning theory and the development of prosocial behavior. In Eisenberg, (Ed.) *The development of prosocial behavior*. Academic press.
- Stub, E. 1970 A child in distress: The influence of age and number of witnesses on children's attempt to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 130-140.